

21 読む行為 内田樹

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。 2 ▽は、本文の追跡・分析。
3 ▼は、読解に関する技法。 4 ☆は、記述に関する技法。

■前提 『現代文キーワード』的な用語多し。「テキスト」「主体」「イデオロギー」「ジェンダー」「フェミニスト」「アイデンティティ」「リテラシー」。カタカナ語も多い。これらの意味の理解が不正確なままでは、とても読めない感じ。

■追跡

① 批評的な読み、あるいは「抵抗する読み」は別に特権的な読みであるわけではない。それもまた、一つの選択的な読み方であることに変わりはない。それを選択した読者は、それとは違う仕方でも読むことができないし、それとは違う読み方で読んでいる読者が同じテキストから現に読み出しつつあるものを直接知ることもできない。

▽正確に読み取っておこう。批評的な読み（抵抗する読み）≡選択的な読みの一つ：自分が選択した読み方でしか読めない。例えば、「舞姫」を、エリスに共感しながら読むことを（いつのまにか）選択した人は、豊太郎に共感しながら読む人が発見しているもの（例えば豊太郎を裏切るものは彼自身の誠実さであることだとか）を知ることとはできない。そんな読みがあるなんて気づきもしない。

② その意味で、「同意する読み手」も、「抵抗する読み手」も、テキストとの相互干渉のうちに巻き込まれて、一回的でユニークな読み手として形成されて、その人以外の誰も読むことのできないようなオリジナルな意味を主体的に読み出しているという点においては本質的に等格だと私は考えている。

▽恐らく、議論の途中から引用されているので、何が争点か、わかりにくい。想定されている対立は何か。テキストに「同意する読み手」と「抵抗する読み手」がいる。無批判に〈作者〉の描くことに同意してしまう素朴で無自覚な読者と、批判的に、〈作者〉の見落としていることや偏見を見抜きつつ読む、主体的な読者がいる。主体的な読者の方が、無自覚な読者より偉い！という考えが想定されている感じがする。筆者は、その考えに対して、反論しているようだ。

「どっちの読み手も同じじゃないか。どっちも、その人ならではの意味を、そのテキスト≡作品から読んでいるだけだ」

③ どのような読みの構えを選んでも、テキストを読むものは自分の身体をテキスト

にねじり込むようにして、主体的、能動的に「自分に固有」の意味を読み出してゆく他ない。ひとりの読み手には一回に一つだけの読み方しか許されない。同時に複数の読み手になってテキストを読んだり、一つのフレーズから同時に複数の水準の意味を汲み上げたりする器用な芸当は人間にはできない。登場人物に共感しているときには、その言動のイデオロギー性は（分かっている）主題化しない。それはゲシュタルト心理学の実験で、「向かい合っている二人の女の白い横顔」と「黒い花瓶」を同時に見る（？）ことができないのと同じ。問1 似ている。人間は同時に二つの視座に立つことはできない。

▽問題集に載っている「ルビンの壺」を見よう。「顔」が見えているときは、「花瓶」は見えない。両方の見え方があることは、頭ではわかるが、体験としては別々だ。「顔」と「花瓶」が瞬間瞬間切り替わるのがわかるだろう。同時に二つの意味を見ることはできない。

例えば漱石の「こころ」のように、登場人物が〈男性〉の立場で語っており、そこに〈男性イデオロギー〉からの見落とし（「お嬢さんの気持ちはどうなるんだ！」）があつたとしても、筋の展開をどきどきしながら追っている読者には、そのときは、そのことは視界に入らない。

◆問1「似ている」とは、何が、どのように？

☆傍線部を伸ばして、「Aそれは、／Bゲシュタルト心理学の実験で、「向かい合っている二人の女の白い横顔」と「黒い花瓶」を同時に見ることができないの／と似ている。」とは？という形にし、A・Bを言い換える。A・Bは対応しているのだから、できるだけ表現も同形にするといい。答案がシャープになる。

（解答例）「テキストに対して、ある意味を読み出しているときに、同時に別の意味を読むことはできない、ということ。知覚において、一つの見え方をしているときは、同時に別の見え方はできないのと似ている、ということ。」

④ すべての読み手はそれぞれ固有の仕方でも物語にかかわっており、その没入の仕方は読み手ひとりひとりで異なっている。ジェンダーはもちろんその「没入の仕方」を規定する大きなファクターの一つではあるが、その他に、読者の階級、国籍、人種、宗教、家庭環境、読書歴、身体能力、性的嗜好……などなど無数のファクターが、読み手の「読み方」に関与する。

▽議論の中心が「ジェンダー」（社会的な性差）にあることがわかる。「男らしいこと」が社会的に強い立場となっている社会や文化では、無意識のうちに、社会的強者≡男、という方程式がしみ込んでいく。無意識にその方程式を身につけている者は、あらゆる物語を、つい、その視点で読んでしまう。一方、その無意識の方程式に自覚的である者が、ここで議論の俎上にのぼっている「抵抗する読み手（主体）」である。

しかし、筆者は「ジェンダーはもちろん、…大きなファクターの一つではあるが、その他に…」という言い方で、「ジェンダー」視点の「特権性」を相対化しようとし

ている。「ジェンダー」は、読み方を決定する色々なファクターの一つにすぎない、というのである。

⑤ **むしろ**、私たちがここで重視しなければならないのは、テキストから一つのユニークでオリジナルな意味を読み出したことによって、【読解1】読者自身がいわば事後的に「私」が誰であるかを知る、ということである。これは現代の読者論の中ではおそらくもっとも生産的な知見であると私は思っている。

▽「ジェンダー」視点から読むのが、特権的に重要だ。いやいや、そんなことはない、それは色々な視点の一つだ——といった議論より、大事なことがある。▼「むしろ」は不等号。AむしろB。A∧B。

その大事なことは、どう読んだかによって、自分がわかる、ということ。例えば、どの人物に共感しつつ読んだか知ることによって、読んだ人が、どのような視点を無意識にとっていたかがわかる。「ここ」のKに共感し、Kの視点から物語の新しい見え方を発見した読者がいたとする。そう見えたことによって、読者である彼は、自分の読みの視点に何が含まれていたかに気づくことになる。

「読者論」とは、作品は読者によって色々な読まれてよい、という立場をいう（ものすごく簡単にいっちゃおうと）。この逆が、作家中心の読み方、つまり「作者のいいこととは何か」を探る「作品論」や「作家論」だ。「作者」なんてどうでもいいじゃん、読者の自由じゃん、というのが、「読者論」。

⑥ 私たちはあるテキストから「何を読み出すか」によって、自分が何ものであるかを知る。

⑦ モーリス・ブランショはかつて作家について次のように書いた。

作家が自分是谁であるかを知り、自己を実現するのは、その作品を通じてである。作品以前には、彼は自分が誰であるかを知らないばかりか、彼はいまだ何ものでもない。作家は作品を書きつつ存在し始めるのだ。

▽「書きつつ存在する」というのは大事だなあ。前もって何かがあつて、それを書く、というのではない。自分はこんな人間で、こういうことを主題としたいので、それを書く、というふうに書いているわけではない。（そう書いていると思っていた人、いるでしょう？ じつは、違うんだなあ。）

⑧ 「作家」を「読者」に、「作品」を「読み」に書き換えると、これはそのまま読者論として成り立つ。この文章はこう書き換えられる。

読者が自分是谁であるかを知り、自己を実現するのは、その読みを通じてである。読み以前には、彼は自分が誰であるかを知らないばかりか、彼はいまだ何ものでもない。読者は読みつつ存在し始めるのだ。

▽「読みつつ存在する」。こうなると読むということは、なかなか能動的な作業ということになる。受動的に、作者様からのメッセージを（受け取る）というイメージと

はかなり違う「読み」がここに示されている。

※試験の時は、「正しいメッセージを読み取れたか」がテストされているって思っているよね。でも、正確に言うとその時は、出題者という読者の「読み」と合致しているか、のテストだといべきだ。特に、選択肢式のときはね。

⑨ エマニュエル・レヴィナスはこのような生成的な読みの理論を説いている代表的な哲学者のひとりである。レヴィナスは、この読みの生成的契機を「懇請／誘惑」(solicitation)と名づけた。「懇請」とはテキストから意味を読み出す「読者の主体的介入」のことである。

解説は本質的に懇請を含んでいる。この懇請なしでは言明のテクスチュアのうちに内在する「語られざること」(non-dit)はテクストの重みの下に息絶え、文字のうちに埋没してしまうだろう。懇請は個人から発する。目を見開き、耳をそばだて、解釈すべき章句を含む書き物の全体に注意を向け、人生に、都市に、街路に、他の人々にも、等しく開かれた個人から。懇請は、そのかけがえのなさを通じて、そのつど代替不能の意味を記号から引き剥がすことのできる個人から発する。

▽こういう独自の用語が出てきたときは注意。引用文内の用語は特にやっかいなので、地の文での言い換えを利用して、「翻訳」しつつ読むべし。「懇請」は意味を読み出す「読者の主体的介入」。おれの読み、おれはこう読む、っていう感じか。「言明のテクスチュア」は、言い表されたことばのもつ手触り、という感じ、ことばづかいには、手触り、表情があつて、たんなる字面を超えて、その向こうにあるものを読み取る、読み取りたいという願いが、意味の「解釈」のときには必要だというのだ。そこには代替不能のその人の読みが生成する。

これはわれわれが直面している「現代文の解釈」の際にもあてはまることだ。「古文」や「英文」は、入学試験レベルのことというなら、あつちのことばをこつちのことばに置き換えればオケというところになっている。「言明のテクスチュアのうちに内在する「語られざること」」だの、行間だの、そのテクストがどのような歴史的社会的状況の中に置かれているかといったことまでは、(ふつう、それほど)問題にならない。しかし、現代文、たとえば小説のようなものでもいいが、単語もわかるし、ストーリーもわかる、でも、そこから何を読み取るのか、という次元になると、そこには、「目を見開き、耳をそばだて、書き物の全体に注意を向け、人生に、都市に、街路に、他の人々にも、等しく開かれた」個人の、読み取りたいという願いが必要になるだろう。「世界」に目や心を閉ざし、集団に埋もれた存在からは、読みの生成機能は起動しない。

⑩ レヴィナスによれば、読みというのは、◆問2非人称的で叡知的なまなざしを通じてなされるものではない。読み手は、それぞれの具体的な生活の唯一無二性ゆえに、他の誰の読み方をもってしても代え難いユニークな読みをする。そのような読み手に対してのみ、テクストは、その人以外の誰によっても読み出されることのなかった唯一無二の意味を贈るのである。

▽「非人称的で叡知的なまなざし」というのはわかりにくいですが、その逆が書かれているから、そこから推定する。「それぞれの具体的な生活の唯一無二性」を通して、「その

人以外の誰によっても読み出されることのなかった唯一無二の意味」が読み出される。対照的になっているのは、①（非人称的（具体的な人間ではない、抽象的な人））／（その人、という具体性）、②（叡知的（非生活的））／（具体的生活）、という二点である。①と②を足すと、具体的な人間ではない、深い真理を知るすぐれた知恵、といった意味が現れる。ここまで来るとわかるが、これは、個々の読み手を超えた、（神）の視点である。Aではなく、B、の型を使うとよい。

◆問2 「非人称的で叡知的なまなざし」とは？
 （解答例）「**具体的な人間の、具体的な生活からの視点ではなく、**」個々の人間を超えて、**深い真理を見抜くような（客観的・普遍的・固定的な）視点。**」

あるテキストに対して、たった一つの（正解）としての読みがある、といった考え方は、この、客観的な神の視点を想定したものだ。神は大きさに響くかも知れないが、例えば、教室での（先生）の答えとか、赤本の解答例とか（笑）、「ザ・正解」といったものを想定することはあるでしょ？ 「国語（の解釈）に答えがいろいろある」ことの責任は「国語科」にあるわけではなく、人間と言語の関係にその本質的な理由がある。解釈が様々な可能であるからこそ、われわれはコミュニケーションできる。進化レベルの低いコンピュータ・プログラムのような、Aといえは意的にB、といった反応しか許されない世界では、人間は生きていくことができない。

⑪ 読み手の「ユニークな読み」を可能にするのは、彼があらかじめ「ユニークな存在」であったからではない。そうではなくて、読み手があるテキストから読み出してくる意味が、他の読み手が同じテキストから読み出す意味とは「違っていた」という事実が、その読み手の「ユニークさ」を基礎づけるのである。

⑫ さきの引用でレヴィナスは、読み手は「人生に、都市に、街路に、他の人々にも、等しく開かれ」ていると定義している。読み手は、「都市、街路、他の人々」によって「あらかじめユニークなもの」として形成されたリアルな人間であるのではない。読み手はテキストと人生に「等しく開かれて」いる。テキストの意味は◆問3 人生経験によって照射され、人生の意味はテキストが開示する。人生と読みはインタラクティブな関係にある。テキストを読むことで人間の生き方は変わり、生き方によってテキストから読み出される意味が変わる。読者が読み出す「意味」はテキストにも属さないし、読者にも属さない。この【読解2】**双方向的で、終わりのない「絡み合い」の運動性**のうちにのみ「読み」は棲まうのである。

▽客観的な読みはなく、それぞれの読みがある、と考えた場合、今度は別の誤解が生じる。それは、読み手の個性が読み方に反映される、という考えだ。ふつうはそう思うだろう。しかし、読み手があらかじめ「ユニーク」↓読みが「ユニーク」。これは間違いだと筆者はいつているよね。どこが間違っているのか？

「生き方」↓「読み方」という一方向だと考える点が間違っている。
 「生き方」↓「読み方」という方向も確かにある。しかし、同時に読むことで、生き方は変わる。具体的な生活とか生き方というものは、固定したものではなく、変化・進化するものだという観点が示される。

これは、ここまでにはなかった、比較的長い時間を想定した読みのダイナミズムで

ある。読書生活の実態は、確かにこのようなものであろう。

◆問3 「人生経験によって照射され」とは？

双方向のうちの「ただけが問われている」。☆傍線部延長。「テキストの意味が、人生経験によって**照射し出される**」とはどういうことか。「照射し出される」という、ちよつと比喩っぽい表現を言い換えておこう。本文から、「人生経験」についての言い換えを探すと、④段落「読者の階級、国籍、人種、宗教、家庭環境、読書歴、身体能力、性的嗜好……などなど無数のフアクターが、読み手の「読み方」に関与する」という部分が見つかる。これなどを参考に「それまでの人生経験が読み方に影響する」などと言えはいい。

（解答例）「**それまでの人生経験が、テキストの読み方に影響する、ということ。**」

⑬ 「懇請」とは**テキストから意味を読み出す「読者の主体的介入」**のことである。厳密に言えば、テキストから意味を読み出しつつあるものとして自己を意識するものが「主体」と呼ばれるのである。読みに先だって「主体」が存在するわけではない。読み手の主体性あるいは「アイデンティティ」は、テキストを読みつつ形成されるのである。

⑭ 「主体は、世界のうちに属するのではない。それは、世界の境界なのである。」というウイトゲンシュタインの言葉は、おそらくこのような事況を語っている。主体とはあらかじめ自存するものではなく、**臨界体験**がもたらす「境界」**感覚**の効果に他ならない。

▽意味を読み出す「主体」とは何か。「テキストから意味を読み出しつつあるものとして自己を意識するもの」。刻々と意味を読む。読むとは、意味を立ち上げること。刻々と読む、その場面に意味（世界）が出現する。意味（世界）を出現させている者そのものが「主体」と名づけられるもの。「主体」は、予め主体「である」のではなく、主体として行為「する」ことによって主体になる。

⑮ 私たちは有限の生を生きている。「死の向こう側」は私たちに知られていない。しかし、かりに私が永遠不死の生命を手に入れたとしても、それによって「死の向こう側」が明らかになるということはない。なぜなら、私が一秒長く生きること、「死の向こう側」はその分だけ私から遠のいてゆくだけだからだ。不死ゆえに、私にとって死はますますとらえどころのない「謎」となる。

⑯ 「私は在る」というときの「私」も「在る」も、「私の外部」や「存在の向こう側」は「ここに在る私」によって**絶対的に知られない**という「境界線の効果」である。

◆問4 主体というのは、そのようなアモルファスな運動であり、「そのつど形成されつつあるもの」である。

▽⑭の「境界」感覚について説明しようとしているところ。「死の向こう側」は「ここに生きてる私」には永遠に知られない。これはわかるだろう。同じように「私の外

部」も「ここに在る私」には知られない。「在る」の向こう側も「ここに在る私」にはわからない。「ここ」と「向こう側」を同時に見ることができるのは、それこそ、神の視点しかない。

主体とは世界を出現させるものだった。しかし、世界の向こう側についてはわからない。自分が意味を読み出ししている境界が世界の境界である。それは読むことと経験の往復の中で刻々と形を変えていく。主体とは自分が世界（意味）の境界を作り出しているという感覚を感じ続けることによって、世界の形を変えていく存在のことである。「なぜ」という問いなので、「そのような」の指示内容をふまえて、どのように不定形になっていくのか、に焦点を当てて書く。

（解答例）「主体は、自分が意味を読み出しつつ、そこが世界の境界であるという感覚を持つため、境界は固定するわけではなく、経験によって刻々と世界の境界の形は変わっていくから。」

このときの「世界」ということばは、「世界史」とかいうときの「世界」とは違う。たんなる物理的空間とも違う。自分がまさにそこにいる、ある意味や理解や想像が届く範囲・場というほどの意味合いだ。その意味や理解は誰が生み出すのか。それを生み出す者をここでは「主体」と呼んでいる。「読む」ことによって、いわゆる現実ではない、例えば、「源氏物語の世界」から意味を読み出し、経験に繰り返り込んだとすれば、彼の「世界」は変化するでしょう？ 文字の本（テキスト）だけでなく、映像もテキストであり、それらさまざまなテキストの読解を通じて、「世界」は変化していく。

⑰ 熱中して本を読み終えたあと、間をおかずに、そのまま一度最初から読み返すことがたまにある。この二度目の読書のときに、私たちは一度目には読み落としていた意味を発見するということが起こる。

⑱ なぜそういうことが起きるのか。それは一度目の読書経験を通じて、「一度目は読み落とした意味」を二度目には読み当てる「リテラシー」を私たちが身につけたからである。このとき私たちが「読める主体」に形成したのはテキストそれ自体であり、テキスト以外にはない。性別も、階級も、信仰も、国籍も、その他のいかなる「テキスト外的経験」も、二度目の読書のときに確認されたこの「リテラシー」の発生には関与していない。

▽「リテラシー」＝読み書き能力。読むという行為自体が、読む能力を発生させる。テキストとの往復自体が、意味を発見させる。それ以外の経験は、関係していない。そういうことがある、と筆者はいう。「読みながら主体になる」という主旨の補強。

⑲ これは「本を読みながら、字を覚える。」という経験と類比的である。

⑳ 私は子どものころ「扱」という字をどう読むのか分からなかった。分からないまま放置していた。そして、ある日、これまで読んできたすべての文脈に合致するこの字の読み方は「さて」しかない、ということに不意に気がついたのである。この字の読み方を教えてくれたのは、学校でもないし、辞書でもないし、家族の誰でもない。テキストそれ自体である。

▽「扱」！ こんな字、ふりがななしで使ってる本って、相当古いよな（笑）。

・ テキストを読むというのは、こちらに「読める主体」がいて、あちらに「読まれるテキスト」がある、というような静止的な関係ではない。そうではなくて、主体はテキストからテキストの読み方を教わり、テキストは主体の「懇請」によってそれまで誰にも開示しなかった意味の相をあらわにする、という双方向的で生成的な経験なのである。読み手はテキストとの「絡み合い」の構造に巻き込まれている。【読解3】

テキスト抜きで読者はいないし、読者抜きでテキストもない。
言語的コミュニケーションにおいて（わたし）と（あなた）はどうあってもお互いを前提とすることなしにはいられない。同じように、（語り手）と（聞き手）（あるいは（読み手））を持たない物語は存在しない。

・ こう書いたのはロラン・バルトである。「読む」とは何よりもまずこの「絡み合い」の経験である。◆問5フェミニスト的な「抵抗する読み手」もまた、「目を見開き、耳をそばだて、人生に等しく開かれてある」ことによって、テキストの新たな相貌を開示し、テキストに内在する「語られざること」を、まったくユニークでオリジナルな仕方で言語化してみせようとする野心において懇請する読み手のひとりであることに変わりはないと私は考える。

▽「こちらに「読める主体」がいて、あちらに「読まれるテキスト」がある、というような静止的な関係ではない」というのが、筆者の書きたいことの核心のようだ。もっと具体的にいうと、フェミニスト的な「抵抗する読み手」という考え方には、どうも、「読める能力を持った主体」とか「ジェンダーの視点に立つて抵抗する読み手」というニュアンスがこめられているが、そういう固定的・静止的な「賢明な読み手」対「（ジェンダー視点に無頓着な）テキスト」という図式は、適切ではないのではなにか？ というのが、筆者の執筆動機と思われる。「ジェンダー視点に立つ意識的自覚的な読み手」もまた、固定的な先入観から読むのではなく、テキストの前でその声に心開き耳を傾けようとする存在であるはずだ／べきだ、といつているのである。

◆問5 「フェミニスト的な「抵抗する読み手」とは？

フェミニストとは、男性中心の価値観を批判し、女性の権利や能力発展の機会を保障することを主張する人たち。フェミニズムとはその考え方。だから、抵抗とは、具体的には、「男性中心の価値観」に対する抵抗である。

ここは「読み手」とある。フェミニズムは、社会的な女性差別を糾弾するだけではなく、学問や文学・芸術の分野においても、その隠れた「男性中心の価値観」を指摘する。「男性中心の価値観」に批判的な読み方をする人、これが問5の指している内容だ。漱石の「こころ」を読んだとき、「お嬢さん」の気持ちがあつた無視されてるやん（描かれてない）、て思った人はいるだろう。それも、ある意味「男性中心の価値観」の現れだ。

（解答例）「男性中心の価値観に基づいた書かれ方や読み方に対して批判的な読み方をしようとする人。」

■読解問題

1 「読者自身がいわば事後的に「私」が誰であるかを知る」とは？

定番、☆傍線部の延長。「Aテキストから一つのユニークでオリジナリティある意味を読み出したことよって、B読者自身がいわば事後的に「私」が誰であるかを知る。」この全体をいかなければよい。ことばが足りない、他の箇所を参考にことばを足していく。また、これは「ふつう」の考えとは異なるものなので、「ふつう」との違いを対比する。そうやって、できるだけ、それだけ読んでも何のことかわかるように書き直していく。

Aに当たる部分の言い換えは、例えば、③段落「テキストを読むものは(自分の身体をテキストにねじり込むようにして)主体的、能動的に「自分に固有」の意味を読み出してゆく」。ここから、自分だけの意味を読む、という言い換えが得られるだろう。

⑧段落の「読者が自分是谁であるかを知り、自己を実現するのは、その読みを通じてである。読み以前には、彼は自分が誰であるかを知らないばかりか、彼はいまだ何もでもない。読者は読みつつ存在し始めるのだ。」も使える。読者としての自分、読むことよって存在し始める、といった表現が得られる。また、常識的な、読む前から読む自分というものは存在している、という考えが否定されていることも、わかる。「〜ではなく、〜ことよって、〜ということ。」といった型にパーツをはめていく。

【解答例】「読む前に予め独自の読み方を持った「私」が存在しているのではなく、実際に読み、自分に固有の意味を読み出してゆくことよって初めて、読者としての自分が存在し始めるということ。」

「事後的に」と縮約されている表現を噛み砕く力が要る。「読んだ後で」でも間違いではないが、後からしばらくして、という感じになってしまう。ここで使った「〜することよって初めて〜する」という表現は、応用範囲が広い。刻々と存在していく感じを出せる。本文にないことばでの確に表現できたら、上級者。

2 「双方向的で、終わりのない「絡み合い」の運動性のうちのみ「読み」は棲まう」とは①どのようなことか②またそういえる理由は何か。

「この」とついているのだから、その指示内容、⑩段落「テキストを読むことで人間の生き方は変わり、生き方よってテキストから読み出される意味が変わる」が言い換えに使える。「読み」は棲まう」は、凝った表現だが、「読むということとは〜することの中にあり」と言い換えればよい。

次に、理由、を問われている。普通に考えるように、テキストに意味が潜んでいて、それを読み手が見つける、というのであれば、読みは一方的で、一回きりである。そうではなく、読みは双方向的で、終わりがなく、というのであれば、「テキストに意味が潜んでいて、それを読み手が見つける」というのではない、ということになる。では意味はどこに？ ⑫段落「読者が読み出す「意味」はテキストにも属さないし、

読者にも属さない。」意味は予めテキストの中にあるのではない。また、独自の読みをする読者が予め存在しているのではない。このことを理由とする。

【解答例1】読むということは、テキストを読むことで読み手の生き方が変わり、また、逆に、読み手の生き方よってテキストから読み出される意味が変わる、といった、テキストと読み手が互いに影響し続けることの中にある、ということ。その理由は、意味は予めテキストの中にあるのではなく、また、独自の読みをする読者が予め存在しているのではないことにある。」

理由と言い換えをくつつける手もある。

(解答例2)「意味は予めテキストの中にあるのではなく、また、独自の読みをする読者が予め存在しているのでもないから、読むということは、テキストを読むことで読み手の生き方が変わり、また、逆に、読み手の生き方よってテキストから読み出される意味が変わる、といった、テキストと読み手が互いに影響し続けることの中にある、ということ。」

3 「テキスト抜き読者のいないし、読者抜きテキストもない」とあるが、テキストと読者の間にはどのような関係があるか。

今回の読解問題は、同じことを色々角度を変えて聞くものになっている。問いに対応した答えの形、を意識しよう。

ここは、2とほとんど同じであるが、構成上は、長い時間の中の読書経験(による変化)についてというよりは、ごく短い時間の中でも確認できる、テキストと読者の関係を聞いている。より原理的な感じがする。：けど、やっぱ、同じやな。

⑫ 段落の表現を使おう。

「テキストを読むというのは、こちらに「読める主体」がいて、あちらに「読まれるテキスト」がある、というような静止的な関係ではない。そうではなくて、主体はテキストからテキストの読み方を教わり、テキストは主体の「懇請」よってそれまで誰にも開示しなかった意味の相をあらわにする、という双方向的で生成的な経験なのである。読み手はテキストとの「絡み合い」の構造に巻き込まれている。」

傍線部を整えれば、答案になる。基本的には「主体」を「読者」に置き換えるだけ。

【解答例】「読者は、テキストそのものから読み方を教わる」とよって(初めて)、意味を読むことを実現し、一方、テキストは、読者からの働きかけよって(初めて)、それまで誰にも開示しなかった意味をあらわにする。このように、一人の人間が意味を読む者になることと、ある文字の羅列が、意味を持つテキストになることは、どちらがなくても成り立たない(同時に成り立つしかない)関係にある」といふこと。」